

社会における 相互行為としての「評価」 - 教室から社会へと踏み出そう -

「多文化共生社会における
日本語教育研究」 サブプロジェクト
担当: 宇佐美 洋
<http://jpforlife.jp/>

1

本プロジェクトで行うこと

- 日本人・外国人の接触場面において、互いの日本語運用を評価する際、
 - 評価観点の選択や評価プロセスにどのような多様性がありうるかを示す
 - それら評価の多様性のなかに類型・モデルを見出していく
- それを、自分自身の評価のあり方を自覚し、調整できるようになるための手がかりとする
- その他、「評価の多様性」に関するさまざまな研究を遂行する

2

本発表の目的

- 本プロジェクトで行っている評価研究の意義・位置づけを、
 - 社会文化的アプローチ
 - 社会的認知理論の文脈から説明するとともに
- 今後の研究発展の方向性について論じる

3

誤解を受けやすい「評価」という語

- 生活場面における外国人の言語能力を測定するテストを作るんですか？
 - テストは一貫性のある評価を求めるもの。われわれの研究は、評価の多様性を追求するもの
- 社会生活においてどうして外国人の言語運用を「評価」する必要があるんですか？
 - われわれの研究枠組みでは、評価とは「必要あってするもの」ではなく、「してしまっているもの」

4

「評価」:本プロジェクトでの定義

- 対象(ヒト・モノ・コト)に対する、価値判断を含んだ一連の認知プロセス、またはその認知の結果
 - 「数値化」を含意しない
 - 評価者・被評価者の間に上下関係を含意しない
 - 本質的には、一貫性、妥当性、信頼性を含意しない
 - これらのことが含意されるのは、特殊な場合の評価のみ。本研究では、さらに包括的な評価を対象とする

5

「評価」に対する昨今の問い直し

- 社会文化的アプローチにおける学習観(佐藤・熊谷2010)
 - 学習を「学習者の能力の向上」としてではなく、「社会的実践における相互行為に参加し、解釈・検証・批判などの行為を行うことによって、周囲との関係性を変化させていくこと」ととらえる
 - 学習とは社会的なもの・相互的なもの
- 能力そのものに着目するというよりは、相互行為の過程で、心内で起こっていることに着目すべき

6

代替アセスメント(alternative assessment)

- 伝統的なアセスメントのアプローチからはこぼれ落ちてしまうものを評価しようとする試み
- 社会文化的アプローチの視点からみたアセスメント
 - 学習の過程を評価
 - 協働的な活動に注目
 - 自己評価・ピア評価に焦点をあてる
 - 具体的には、ポートフォリオ、ジャーナルの使用、ダイナミックアセスメント等の形態をとる

7

代替アセスメントがカバーしていない観点

- 代替アセスメントは、「社会における相互行為のありようを、教室という文脈に持ち込もうとする試みのひとつ」と解釈される
- しかし、
 - 学習者が学習を行うのは、教室の中だけではないはずでは？
→教室の外での学び、という観点はカバーしていない
 - 社会において学習すべきなのは、いわゆる学習者(外国人)だけではないのでは？
→外国人受け入れ側(日本人)の学び、という観点はカバーしていない

8

「社会における相互行為としての『評価』」という思想

- 社会文化的アプローチの思想に基づきつつ、「代替アセスメント」がカバーしていない部分に焦点をあてるもの
 - 「教室外での学び」に着目
 - 教師の評価だけでなく、一般日本人の評価にも着目
 - 「日本語学習者の学び」だけでなく、「受け入れ側の日本人の学び」にも着目
 - 一般日本人に対し、自分自身の評価のあり方の問い直しを促す
 - 学習者側から見た日本人の言語運用の評価も扱う

9

そのためにすることは・・・(再掲)

- 日本人・外国人の接触場面において、互いの日本語運用を評価する際、
 - 評価観点の選択や評価プロセスにどのような多様性がありうるかを示す
 - それら評価の多様性のなかに類型・モデルを見出していく
- それを、自分自身の評価のあり方を自覚し、調整できるようになるための手がかりとする

10

社会的認知理論の援用

- 言語教育分野において、評価の結果に焦点をあてた研究は多いが、評価のプロセスの個人差に焦点をあてた研究は少ない
 - 属性差に焦点をあてた研究は多いが
- 心理学における社会的認知理論(対人認知研究)が参考になる
 - 「他者について同じ情報が与えられても、人によって形成される印象が異なるのはなぜ？」という問題意識から発する研究

11

古典的な社会的認知理論

- Kelly(1955): 個人的構成体理論
 - 人間はみな科学者。自分を取り巻く環境に生じる事象を解釈し、予測し、統制しようと試みている
- コンストラクト:
 - 事象の解釈や予測・統制の基本となる要素
 - 人々が世界を知るために作りあげた「透過パターンあるいは眼鏡のようなもの」
 - 1つひとつのコンストラクトも、それらが体系化された「コンストラクト・システム」も、個人に固有の性質を持つ→「解釈の独自性」が生じる

12

認知過程の個人差に着目した研究(1)

- Higginsらの「アクセスビリティ(accessibility)」
 - 「利用可能な知識がもっている、活性化のポテンシャル」のこと(Higgins,1996)
 - 同じような知識体系やコンストラクト・システムを持っていたとしても、そのうちどのようなコンストラクトがアクセスされやすいかには個人差がある
 - 頻繁にアクセスされるコンストラクト→常用的コンストラクト(chronically construct)

13

認知過程の個人差に着目した研究(2)

- Witkin & Goodenough (1981)の「場依存性 - 場独立性」
 - 判断の基準をどこに求めるかの傾向性の相違
- 場依存性(field-dependent):
 - 判断の基準を外的な場に求める = 環境が変わると基準も変わる
- 場独立性(field-independent):
 - 判断の基準を自分自身に求める = 環境が変わっても基準は変わらない

14

認知過程の個人差に着目した研究(3)

- Epstein(1994)等の「認知-経験的自己理論」
 - 情報処理様式として、「経験的システム」と「合理的システム」を想定
 - 経験的システム:感情とつながりをもつ、前意識の情報処理
 - 合理的システム:感情とはつながりを持たない、意識の情報処理

15

個人の評価のあり方を支配する 3つの要素

1. 個人が固有に持っている、特定の評価観点に対するアクセスの指向性
2. 周囲の環境が、評価観点へのアクセスに対して与える影響の様態と、その大きさ
3. ある特定の評価観点をを用いて情報処理を行う際の、処理様式の相違

16

評価における情報処理様式の 相違:具体例

- 「ゴミの出し方が悪い」というクレームに対する謝罪文(外国人が執筆)において、「これからはルールを守る」という言明があった。これに対し,
 - 評価者Aさん:「郷に入っては郷に従え」。ルールを守るのは当然なので、高評価
 - 評価者Bさん:慣れない日本で、日本のルールを守ろうと努力してくれているところに強い親しみを感じるので、高評価

17

2010年度 本プロジェクトの成果

- 主として「外国人が書いた日本語文章」を対象に、日本人の評価のあり方を、質的・量的データの両面から分析
 - 宇佐美洋「日本語学習者の書いた謝罪文に対する日本語教師の評価態度—質的分析によるその多様性の解明—」
 - 森篤嗣「フランス語母語話者の作文における日本語母語話者の評価 - 日本語教師と一般日本語母語話者による全体評価と部分評価の相関から -」(以上、第11回フランス日本語教師会シンポジウム)
 - 宇佐美洋「謝罪文において「書き手の態度」を評価する、とはどういうことか - PAC分析によるケーススタディ -」(2010世界日語教育大会)
 - 宇佐美洋「文章の評価観点に基づく(評価者グループ)の試み - 学習者が書いた日本語手紙文を対象として -」(『日本語教育』147号)

18

2010年度 本プロジェクトの成果

- 評価研究に使用するためのデータの整備
 - 吉田さち, 野原ゆかり, 森篤嗣, 宇佐美洋「生活場面で必要となる日本語書きことば」データに対するコミュニケーション機能の付与 - 4種類の交渉場面に関する文章を対象として - 」
 - 野原ゆかり, 吉田さち, 森篤嗣, 宇佐美洋「日本語学習者による日本語 / 母語発話の対照言語データベース」へのタグ付け - コミュニケーション研究に対する多様な応用のために - 」(以上, 社会言語科学会第26回大会)
 - 宇佐美洋, 森篤嗣, 野原ゆかり, 吉田さち「外国人の日本語話しことばに対する日本人評価の多様性を探る: 質問紙による量的調査」(Seventh International Conference on Practical Linguistics of Japanese 発表予定)

19

2011年度予定

- 日本人発話に対する, 外国人側からの評価調査の実施
- 公用文と, その「やさしい日本語」への書き換え文とを対象とした評価調査(「やさしい日本語」と評価されるには何が必要かの調査)
 - 一橋大「やさしい日本語」科研との連携
- 日本人に対する, 「自分の評価観自覚のためのワークショップ」試行と, その分析
- 評価プロセスの理論化の継続

20

本プロジェクトの目指すもの

- 教室内だけでなくとどまらず, 社会に向かって発信していける研究を
- ことばの学びの支援だけでなく, ことばを使った活動の支援を目指した研究を
- 「学習者の日本語を教えるための研究」ではなく, 「異質な者同士の接触により, ともに向上していくための研究」を

21

参考文献

- 佐藤慎司, 熊谷由理(2010)『アセスメントと日本語教育: 新しい評価の理論と実践』, くろしお出版
- 榎本博明・安藤寿康・堀毛一也(2009)『パーソナリティ心理学』, 有斐閣
- 山本真理子他(2001)『社会的認知ハンドブック』, 北大路書房
- Epstein, S.(1994) Integration of the cognitive and the psychodynamic unconscious. *American Psychologists*, 49, 709-724.
- Higgins, E.T.(1996) Knowledge activation: Accessibility, applicability, and salience. In Higgins et al. (Eds.) *Social psychology - Handbook of basic principles*. New York: The Guilford Press.
- Kelly, G.A.(1955) *The psychology of personal constructs*. Norton
- Witkin, H.A., & Goodenough, D.R. (1981) *Cognitive styles: Essence and origins*. International University Press. (島津一夫監訳, 1985『認知スタイル - 本質と起源』, プレーン出版)

22